禪の友

ZEN no TOMO

5

2023

ご本山だより

大本山永平寺【安居（あんご）】

安居というのは仏道修行に専念をする、安心して落ち着いて生活をする意味で、お釈迦さまが雨期の三カ月間禁足（きんそく）の制を定められたことに始まります。日本では「夏安居（げあんご）」や「雨安居（うあんご）」と呼ばれ、旧暦四月中旬から七月十五日に至る三カ月間を「制中九旬安居（せいちゅうくじゅんあんご）」といいます。

永平寺の夏安居は五月十五日から八月十四日まで。この間、修行僧は禁足で、原則として他出はできません。また、この期間に新たな修行僧を迎えることもありません。

夏安居の三カ月間は修行僧の第一座である首座（しゅそ）和尚を先頭に立て、互いに切磋琢磨し坐禅修行に励みます。

道元禅師は『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』「安居」の巻に〝安居を行（ぎょう）ずるは仏を行ずるなり〟とお示しです。

永平寺での修行生活の起居動作、衣食住の総（すべ）てが「仏の道」に適（かな）い、「仏の法」の如く日暮らしする毎日が〝安居〟であり、〝安居〟を行じる修行僧はそのまま〝仏〟としての生活を行じているのです。

修行僧たちが学ぶことは多く、修行の年数を重ねても覚束ないことも度々です。各々が先輩から教わったとおりに見様見真似で懸命に精進しております。しかし、ふとした瞬間に無意識の内に仏道に適（かな）った、仏法の如くの一挙手一投足（いっきょしゅいっとうそく）が現れてまいります。

そのふとした瞬間が半年経った時か、一年経った時か、将又三年五年十年か分かりませんが……できたと気付いている内はまだまだ我見かもしれませんね。

大本山永平寺
福井県吉田郡
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより
大本山總持寺【五月の總持寺】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二一

五月の呼び方には花の名の由来の「皐月」、田植えをする月から「早苗月」、旧暦五月は新暦の六月ごろにあたるところから「雨月・五月雨月」など多くの異名があります。

また風薫る五月と言われるように總持寺境内の青々と茂った木々の間を爽やかな風（薫風）が吹き抜けていきます。

すでに四月十九日近畿管区で總持寺開祖瑩山禅師七〇〇年大遠忌予修法要が始まっており、今後海外も含めて十二カ所で厳粛な法要が勤まり、来年四月からはいよいよ本法要が總持寺を会場として勤まります。

五十年に一度のめぐり合わせに感謝しつつ、準備万端にて法要に臨んでいく所存であります。

さて總持寺本山僧堂では四月より夏安居制中という一〇〇日間の修行期間に入っております。

安居の始まりは釈尊在世より始まったものです。インドで雨期に入ると修行者は遊行をやめて精舎にこもって修行に専念するように規定したのが安居の始まりです。

特に本山では五月十三日～十七日にかけて「制中五則」という大切な行持が行われます。

その五日目には「首座法戦式」のクライマックスを迎えます。

修行僧の先頭に立って指導するリーダーである「首座」が石附禅師さまの命を受けて大勢の修行僧と禅問答を交わし、修行で培った全力量を発揮し、緊張感の漲る場面が展開されるのです。

この五則が終了するとようやく一〇〇日間の修行期間の半分が終わり、また更に首座を中心として修行僧が皆同じ方向を向き、協力し合うことで乳水のようになって行くのです。瑩山禅師はこれを「一味同心」と示しておられます。

新緑にいよいよ古き伽藍かな

日野草城　撰

曹洞俳壇

選・坊城俊樹

小かまくら灯の入り神の宿りけり

秋田県　鈴木　ゑい子

評　「かまくら」とは雪洞自体をいう。竈に似ているからとも、神の座だという説もある。それが灯るのはつまり神が宿ったから。真冬の極寒の地ではそれもまた暖かで美しい風景として親しまれる。こんな美意識の日本人とはなんと床しい人たちなのか。

鈍色に沈む絵踏の物語

岐阜県　大下　雅子

評　踏絵といえば、長崎県が有名。しかしその物語にはいくつもの悲話があるのだろう。かつて五島列島に行ってそんな話を聞いたことがある。殊に質素なクリスチャンたちの話はまことに鈍色に沈んでいた。そして山間にある小さな教会もまた。

◆御仏と神の間（あはひ）の梅の花　島根県　金山　陽

◆春炬燵猫の余生を撫でてをり　東京都　鈴木　英治

◆雪焼の顔そのままに出勤す　東京都　松本　キヌヱ

◆春磯の小魚跳ねる潮溜り　石川県　千間　宏治

◆篆刻の朱印の映ゆる年賀状　埼玉県　伊藤　博

◆月光に研ぎ澄まされし軒つらら　秋田県　鈴木　芳生

◆瀬戸内の夕日隠れに浅利舟　山口県　中井　清子

◆園長の鬼で園児等豆をまく　岡山県　有元　克英

◆水仙やこんなに碧い日本海　愛媛県　井上　征郎

◆己が撒き己が拾ひし豆を撒く　静岡県　堤　柳泉

選者吟

玉砂利の数だけ戦死した師走

俊　樹

作句小見　この句は戦争の死者を祀っている神社で作った。無数の玉砂利を踏んで拝殿へ向かうと、その一つ一つが戦死者のように思えてきた。戦闘で死した者ばかりでなく、空襲などで死んだ人たちも居る。その上に現代の人たちの幸福があるのはむろんのこと。

【送付先】〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁　禅の友係

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

転勤のたびに転居の部屋の窓絵をかけかへるごとく楽しむ

静岡県　石濵　徹

評 この職場はかくも転勤が多いのか、交通の便が良くなったとは言え、家族と離れ大変なことだ。しかし作者は、窓から見える風景を「絵を掛け替えるごとく」と詠う。遣り甲斐のある仕事に情熱を傾ける前向きな作者像が浮かぶ。

奥津城にはあなたひとりで来てほしと木綿のごとく生きた亡き妻

福島県　佐藤　忠

評 働き者で周囲の人たちへ濃やかな心配りができた「木綿のような」慎ましい生き方をしてきた妻、その人が夫へ遺した言葉が深い愛に満ちていて心うたれる。

◆動かざる寒風の中のトラクター働きづめの人今はなく
埼玉県　丸山 劫外

◆稲作り止めると言いし友のこと思い出しつつ春の田打てり
鳥取県　眞山 博充

◆吾が半生座右の辞書よ揉みくたの表紙かばいて今朝もひらきぬ
岩手県　宍戸 さとる

◆新雪に突っこみ車立往生　暁天坐禅なかばあきらむ
長野県　髙橋 和夫

◆「風花」とう映画のラストシーンまた眼裏に顕たす風花のなか
兵庫県　前田 あつ子

◆雪解けのしづくの音のいつか絶え更け沈みゆく底冷えの夜
鳥取県　徳本 義則

◆水を飲む気が付くたびに水を飲む命の玉を繋ぐごとくに
山口県　濱田 道子

◆広ごれる葦焼きの跡日の中に虫も草また時を待つらむ
茨城県　田口 昭子

◆青空のどこかに触れあるらしく風の間を舞ふは風花
大阪府　柏原 才子

◆黍、胡瓜、茄子とトマトはその隣　寝床で段取る春遠かれど
山形県　髙橋 正幸

選者詠

石蹴ればカーンと音がしそうなり不純なものはみなしずまりて

ちづ

作歌小見 トラクターに焦点を合わせて詠う丸山さん、亡くなる最期まで農作業をしていた高齢の人への哀悼の念が描写のみで伝わります。稲作を止めた友を詠う眞山さん、まだ遠い春ながら農作業の段取りに心逸る髙橋さんの歌にも惹かれました。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。